

## 第16回

### 「近代建築家の茶室論にみる中柱について」

近藤 康子（現代ビジネス学部都市環境デザイン学科 専任講師）

### 「京都府下の河川における抗菌薬耐性菌の分離状況と分子生物学的解析」

中村 竜也（健康科学部臨床検査学科 准教授）

開催日時：2020年1月30日（木）15:00-17:00

開催場所：京都橘大学 響友館 F301

---

## 実施報告

---

### 近代建築家の茶室論にみる中柱について

都市環境デザイン学科 近藤 康子

建築家・堀口捨己（1895-1984）は、昭和初期に日本建築の本来のありようが模索される時代背景のもと、伝統的遺構としての茶室に価値を見出し、近代における新しい茶室や数寄屋を創出しました。また堀口は茶室や茶の湯についての精緻な研究を行い、近代茶室論の思想的基盤をなしたことで知られています。

今回の発表では、特に堀口の茶室研究に焦点をあて、かれが茶室の構成要素のなかでも特に重要視していた「中柱」の意味について、妙喜庵待庵と有楽苑如庵を例にあげながらお話ししました。

中柱は、炉の隅あるいは客座と点前座の境に立てられ、一般的に袖壁や釣棚を伴います。千利休によって中柱が創始された当初は真っ直ぐな柱が用いられていましたが、利休の一畳半に曲がった柱が立てられてからは、曲柱の使用が通例となったとされています。

講演後の質疑応答では、中柱の形態の変遷や、中柱と床柱の身体性・精神性などについて、大変貴重なご意見をいただきました。京都橘大学という組織のなかで自身の専門性がどのような位置にあるのか、見つめ直す得難い機会となったと感じております。



堀口捨己の研究と創作

---

### 京都府下の河川における抗菌薬耐性菌の分離状況とその分子生物学的解析

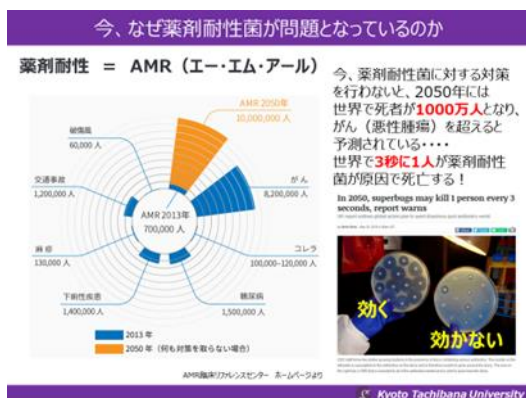
臨床検査学科 中村 竜也

2050年、抗菌薬に対する耐性を獲得した細菌（薬剤耐性菌＝AMR）による感染症の死亡者数が世界で1,000万人を超え、悪性腫瘍（がん）による死亡者数を上回ると言われています。世界的にも薬剤耐性菌の対策が行われており、日本においても厚生労働省が中心となって実施されています。また、近年、薬剤耐性菌の蔓延はヒトだけでなく、動物や環境に

も存在し、それらがすべて関係していることがわかってきました。これが、One Health という概念であり、それらに対する対策も必要とされています。

ヒトから分離される薬剤耐性菌に関しては多くの論文やデータが存在しますが、環境における調査報告は少ないのが現状で、未だデータ不足となっています。そこで、私たちは環境調査の手始めとして、京都府下の河川における薬剤耐性菌の分離状況を調査し、ヒトから分離される薬剤耐性菌との関連性を分子生物学的解析による解明を試みました。本サロンでは、大腸菌の薬剤耐性菌の検出状況について報告しました。現在、世界的に蔓延している薬剤耐性大腸菌が存在しますが、それらが京都府下の河川6か所から分離されました。また、鶏から分離報告のあるタイプの大腸菌が検出されていることも紹介しました。このように、京都府下においても、環境中に抗菌薬に耐性を示す菌の存在が明らかとなりました。

今後は、これらの薬剤耐性菌がどのようにして拡散しているのかを、全ゲノム解析などを導入し解明していきたいと思えます。



## 参加者報告

お菓子や飲み物が提供される和やかな雰囲気の中、研究サロンでは2つの報告が行われた。1つ目は、現代ビジネス学部近藤康子先生の茶室における中柱の意義に関する報告であった。近代建築家の堀口捨己の言説から、中柱は茶の湯の中心である「炉」と、直接茶の湯に関係しない掛物や花が飾られた「床の間」という対照的な2つの場に「釣り合い」を与えるものであるという意義が導き出された点が興味深かった。報告から、京都に多い茶室をどのように鑑賞したらよいか、ヒントをもらうことができた。

2つ目は、健康科学部の中村竜也先生の薬剤耐性菌に関する報告であった。細菌が耐性化する要因や、京都府の20か所における薬剤耐性を持った大腸菌の検出調査とその解析結果などを説明された。薬剤耐性菌によって、最悪、2050年に世界で約1千万人が死ぬという予想も出されていることを踏まえて、「早く見つけて退治しないといけない」とのお話があったことが特に印象に残った。

